

1999年12月発行 第23号

## 「成功の陰にあるもの、失敗の陰にあるもの」

進路指導部 橘川 直人

現在、高等専修学校では、二年次の職場実習が次々と行われている。ある生徒はイタリアンレストランの厨房で汗を流し、またある生徒は美容室にて雑務をこなす。その中で、ある程度の評価をいただくことができたとする。毎日持参する実習日誌の評価欄には、「よい」「ある」が並び、「ふつう」「ない」は滅多に見られないこともある。まれにはあるが、最終日にスナップ写真を撮っていただき、持たせていただけたこともある。社員の方々の好意により記念の品をいただいたこともある。まさに二年次の実習としては大成功であろう。しかし、ここで考えなくてはならないことがあるのではないか。

職場実習として成功したからと言って、必ずしも就労ができるとは限らない。例えば、店舗採用の企業の場合、店長の異動一つで状況はまったく違ってくることもある。店長個人レベルでの相性とか情とかを盲信してしまっただけでは危険なときもある。店長も所詮は雇われの身、一企業人なのである。完全なる個人経営の会社等を除いて、人事異動等があっても不変の部分における見極めが必要となってくる。生徒自身の適性、就労場所としての適性を客観視すべきである。

一方、実習時に多くの課題が出て、表面上は苦い経験となったとする。その時にただ自信を失うのではなく、課題を客観的に分析することが前進の鍵となるだろう。ある職場における失敗事項はその職場だけにしか起きないとは考えづらい。その要因を突き止め、改善して初めて前進であろう。真の前進のためには辛苦をなめるべきである。知らず知らずのうちに、自分の都合で物事を考えがちになるが、意識的に客観視することで軌道修正できるのではないだろうか。

前述したことは、二年次の職場実習に限らず、就労後の職場定着においても大変重要なことだと考える。職場は、社会人の集まりである。至極当然のことながら、ここに大きな落とし穴が存在するのではないだろうか。「社会人」「イコール」「教員」ではない。頭では理解していても、肌で感じるまでは実感出来ないことが多い。ごく自然な会話のなかに、大きな（深刻な）課題が潜んでいる場合がある。「教員」の言葉が高圧的とはいわないが、正しい理解に結びつけるためには状況に応じてアプローチの工夫を凝らす。長年の学校生活のなかで、知らず知らずのうちに「教員」に依存していた判断がありはしないか。日々の生活の中で、真意を見極める客観性を維持したいものである。